

妻籠の脇本陣

宿と酒蔵

妻籠の脇本陣には玄関口がふたつあり、今日使われている玄関口は、この脇本陣を勤めていた林家と、造り酒屋用でした。現在のチケット売り場は、かつて酒樽の倉庫でした。畳敷きの上段の間の中央の窓脇にある机は、番頭が座り、商品の出入りに目を光らせており、造り酒屋の従業員は番頭の席のちょうど上にあたる 2 階で生活していました。

囲炉裏

玄関の右側には囲炉裏が上段の板の間に設えられた、囲炉裏の間があります。家族は囲炉裏を囲むようにしてそれぞれの序列により決められた場所に座りました。全権力を持つ家長が、煙と隙間風の影響を一番受けない奥の席に座りました。家長の席の近くには、足を温めることができる木製の足置きが囲炉裏の灰の上に設置されていました。客人は、家長の左隣に道路を背にするように座り、家長の妻は家長の右隣に座りました。

お祖母さんは、柔らかく暖かい畳の上に座ることができましたが、家長の妻は硬く冷たい板の間で満足しななければならないなど、女性の扱いについては微妙に区別されていました。しかし、最悪な席、扉に最も近く、隙間風や煙の影響を最も受ける土間に座っていたのは子どもたちでした。子どもたちは、このような経験から我慢することと、目上の者を尊敬することというふたつのことを学ぶことになっていました。

煤汚れたヒノキ

囲炉裏には煙突がなかったため、そこから出た煙のほとんどは家の中に残りました。これにより、家が乾燥した状態で保たれ、木材の腐食を予防しました。そそれはまた、この家の建築に使われたヒノキが、時間の経過とともに当初の白い色からどんどん濃くなる煤の色で黒くなったということを意味します。主婦の仕事のひとつに、天然の油分を含むもみ殻がたっぷりに入った小さな袋で木張りの壁を磨く作業が含まれていました。よく見ると、地面から 2m ほどの高さまでは輝いており、それ以上主婦の手が届かないために磨けない高さの個所には光沢がないことがわかります。ほとんどの木材と異なり、ヒノキは、時間の経過とともにその強度が増します。ヒノキ材の寿命は約 1,000 年で、その強度は伐採後 800 年あたりで最高になります。つまり、この家の強度は 2677 年に最大になり、2877 年までは再建する必要がないということなのです。

皇室からの客人

ほとんどの本陣と脇本陣と同様に、林家は、建物の左側（通りから見て）で生活し、宿泊客は右側に宿泊していました。この家の屋根のいずれかの端に乗っている鯨（シャチホコ）という空想上の魚にご注目くだ

さい。これらは、その水との関連性から火事を避けると考えられており、また、魚にはまぶたがないため、常に警戒するものであり、また、悪魔を撃退するものだと考えられていました。

妻籠宿脇本陣は、1880 年 6 月 28 日に明治天皇という非常に重要な来訪者が短時間の休憩に立ち寄った際にもてなしました。明治天皇は、庭園へとつながる装飾を施した門から中に入り、この家の右奥にある部屋を使用されました。

ほとんどの駕籠は、その中の旅人が駕籠かきよりも低くなるように設計されていましたが、これは当時神様だと考えられていた天皇には好ましくなかったため、代わりに、明治天皇は、身体の全体が駕籠かきの肩より高くなる、神輿のような特別な駕籠に乗って来られました。国を挙げた近代化と西洋化に取り組む決意を表明するためのものだったのか、フランスの軍服を着用した陛下は、乗馬靴を脱ぐことなく家の中へと続く赤絨毯の上をそのまま歩いて入られ、折りたたみ椅子に座ってお茶を一服楽しまれました。当時の当主は、明治天皇が休憩されたことを記念して、茶卓の裏にその旨を記載しています。(ちなみに、この茶卓は、釘を打ち付けるといふ行動が、天皇に対する暴力を連想させるため、釘を使わずに作られました。)

陛下がここに滞在したのは、お茶を楽しむだけの時間のみで、陛下の滞在に合わせて作られた大きなお風呂を使うことは全くありませんでした。この内部には、結露により天井の端にできた雫が入浴者の頭に落ちずに端に流れるように設計された、優美な唐傘天井の意匠は注目に値します。

林家の博物館

脇本陣の奥には、1679 年当初の建物の模型と一緒に林家の日用品が展示された小さな博物館があります。多数の書簡、葉書や、妻籠本陣を勤めていた家族の親戚である著名な作家、島崎藤村 (1872 年～1943 年) の数々の著書の初版は文学者の興味を引くでしょう。島崎の初恋の相手は、林家に嫁ぎましたが、このふたりは大人になり、パリのように遠いところに行ってもなお連絡を取り合っていました。幕府の崩壊により天皇制へと変わった時代の、木曽地方の社会の大混乱を描いた島崎の歴史小説、『夜明け前』(1929 年～1935 年) は日本文学の傑作です。

木曽谷に新設された国道や鉄道が 1892 年と 1909 年にそれぞれ開通した後、中山道は便利な街道としての役目を果たさなくなり、また宿場町も旅人には必要のないものになってしまいました。妻籠宿が他の宿場町と異なっていたのは、宿泊客があまりいなかったことにより妻籠宿全体と脇本陣が取り壊しや、建て替えから救ったという点です。この脇本陣に関するもうひとつの重要な事実は、1967 年に妻籠宿の保存と復原に関する話し合いの第 1 回目が行われたのがこの家の囲炉裏端だったということです。